

平成 27 年度徳島大学附属図書館読書週間行事  
第 3 回「TOKUDAI 川柳」テーマ「本と夢」 入賞作品講評

選考委員会委員長・総合科学部教授  
石川 榮作

今年度も第 3 回「TOKUDAI 川柳」を募集したところ、昨年度とほぼ同じ数の 64 点の応募がありました。8 人の審査委員により、評価し、総合点の高い順に選考し、同点者がいる場合は 8 人の審査委員で相談の上、別紙のとおり、表彰者を決定しました。

今年のテーマは「本と夢」としたところ、読書を通して未来の夢に向かって努力しているさまが読み取られる作品が多くて、優劣がつけにくい傑作揃いでした。入賞者の作品について簡単なコメントをつけておきますので、このコメントを参考に次回も多くの傑作をお寄せください。

まず最優秀賞には、多くの審査委員の高い評価を得て、「背中押す 筆者の声で開く道」が選考されました。今回のテーマは「本と夢」ですから、どこかに「本」と「夢」をほのめかすような言葉が要求されますが、「本」は「筆者」から、「夢」は「開く道」から容易に連想され、自らの読書体験を五・七・五の中に簡潔明瞭に表現しているところが高く評価されます。読書を通して将来の夢は膨らむ一方で、現実にはつまずくことも多い中、やはり未来への夢の道を開いてくれるのが、著者の言葉であることは、読書に親しむ人なら誰もが体験することではないでしょうか。個人の読書体験が客観化されているところもすばらしいと思います。今回の「読書と夢」のテーマにぴったりの作品と言えます。読書を通じて試行錯誤しながらも自らの将来の夢への道を切り開いていただきたいと願っています。

優秀賞の最初の作品「今はまだ 始めの箇所を 置くしおり」も、夢に向かって読書に励むものの、まだまだ自分の未熟を悟る一方、大きな期待も胸に抱いているさまが読み取られます。始めの箇所にしおりを置くことで自らを謙虚に省みて、未来の夢に向かおうとする決意が読み取られるところが高く評価されます。

優秀賞の 2 番目の作品「たかが文字 されど数多の 夢を生む」も、読書から数多(あまた)の夢が生まれることを五・七・五の中に表現していて、傑作です。本は文字が印刷されているものに過ぎませんが、しかし、それに取り組む読者の姿勢次第では、数々の大きな夢を生み出してくれます。文字を追っているうち、つい眠くなって、夢の中に落ち込むこともあるかもしれませんが、しかし、

未来への夢を描きながら読書を続けていけば、必ずやその夢への道は開かれていくものです。

優秀賞の3作目「出会うべく 夢を探しに 本を手」も、同様に本の中に夢を求めている、本は夢を手にするための1つの出会いとしているところが高く評価されます。限りなく無数にある本の中から、自分を待っていてくれる本に出会ってほしいものです。

入選の1作目「紙めくり 心躍らせ 夢枕」は、将来の夢を見る者が心躍らせて夢に向かって読書に取り組むものの、いつの間にか寝てしまったことを表現しており、滑稽さも読み取られます。入選2作目「本の中 次なる夢を 追いかける」は、読書を通じて迷いながらも自らが成長していることが読み取られ、さらに次の夢を求めて努力しているさまを表現しているところがすばらしいと思います。入選3作目「無我夢中 本の世界に 夢馳せる」は、将来について暗中模索で考えている現在、本に触れることで、自分の世界を広げ、将来の可能性について考えていることが読み取られます。入選4作目「ベストセラー 今は羊の 群れの中」は、日々生まれてくる無数の本を羊の群れに喩えているところがすばらしいと思います。入選5作目「枕もと 夢か現(うつつ)か 母の声」は、母の声を耳にすると、幼い頃に寝る前によく母親に絵本を読み聞かせてもらったことが思い出されて、夢の中にいるかのような不思議な気持ちにさせてくれます。母親に絵本を読んでもらった幼い頃の体験は、何にも代えがたいものです。入選6作目「読書の地 ゆめ忘れるな 学びの知」は、読書の場として図書館を利用して、そこで得た知識を自らの夢へとつなげる努力が読み取られ、夢を忘れないよう、自らを戒めているところも評価されます。「地」と「知」をかけているところもよいと思います。

以上のとおり、今年の入賞作品は、川柳の主な特徴であるユーモアや風刺というよりも、真剣な態度で将来の夢を追いかけているさまを表現したものが多くなっていますが、いずれも読書の大切さを唱えていて、附属図書館の読書週間行事にふさわしい傑作揃いと言えます。今回入選に漏れた作品の中にもすばらしいと思われる作品がいくらかありますが、賞の数には限りがありますので、漏れた人は本当に「しょうがない」ですね。次回の応募をお待ちしています。自らが胸に抱いている将来の夢を実現させるためには、やはり読書は欠かせません。「本と夢」は本当に強く結びついています。大きな夢を実現させるべく、日々本と関わっていくことの大切さをゆめゆめ忘れてはなりません。学生の皆さんの今後のますますのご健闘を祈っています。